30amE-144

子育て中の母親の悩み・不安に対する薬剤師による支援の必要性 — 兵庫県播磨薬剤師会によるママサポ会を通して —

○波多江　崇[1], 坂口　知子[2], 中川　素子[3], 野口　栄[4], 水田　恵美[5]([1]神戸薬大, [2]じけまち調剤薬局, [3]中川調剤薬局, [4]アイリス薬局, [5]ハリマ調剤薬局 播磨町薬局)

【目的】本邦における薬局数は約 5 万店を超え、コンビニエンスストアの店舗数を遥かに凌ぐ数となっている。薬局にとって、保険調剤、OTC 医薬品、衛生用品、日用品の販売だけでなく、地域住民からの相談窓口としての機能も重要な役割である。現在、核家族化、地域のつながりの希薄化から、子育て中の母親が孤立し、悩みや負担を抱えていることが問題となっている。そのため、厚生労働省では地域子育て支援拠点事業を展開している。兵庫県播磨薬剤師会では、兵庫県からの委託事業により、薬剤師による子育て支援事業の一環として、平成 23 年度より出前講座型のママサポ会（以後、会と略す）を実施している。会を通して、子育て中の母親の悩み・不安などが多いことを実感した。そこで、会に参加した子育て中の母親を対象にアンケートを実施し、子育て中の悩み・不安とその背景を探ると共に、会で集まった質問を分類することで、薬剤師が地域の子育てにおいて、今後、どのような役割を果たすべきかを検討した。【方法】平成 24 年に兵庫県播磨地区で開催した計 5 回の会に参加した子育て中の母親に、16 項目からなる無記名・自記方式のアンケートを実施した。また、会で集まった質問について、薬剤師が主に対応すべきものと、行政または主治医に相談を勧奨すべきものとに分類した。【結果】アンケートの結果、子供の数が 1 人の母親と 2 人以上の母親では、悩み・不安が異なることが判明した。また、20 歳代の母親と 30 歳代の母親においても、悩み・不安が異なることも判明した。さらに、質問を分類した結果、薬剤師が主に対応すべきものが多かった。【考察】子育て中の母親の悩み・不安について、薬剤師が対応できるものが多かった。今後、薬剤師は店舗内に留まって日常業務を行うだけでなく、積極的に地域に出向き、子育て支援を行う必要性がある。